

平成 18 年度情報文化科提言

情報文化科では「心のふるさと多可のまち見つけた」をテーマに今年度の学習を進めました。地域で个性的に活躍されている方を招いたり、現地へ出かけたりと、楽しく興味が持てる講座を計画いたしました。また、学外研修では、酒蔵のまち並みや川の景観を生かしたまちづくりが印象的な京伏見と、塩と忠臣蔵の赤穂。そして古いまち並みを生かした坂越の散策に出かけました。

旧 3 町が合併して 1 年余り。「多可町」を自分のふるさととして意識できるよう、また多可町が魅力あるまちとして発展していくために以下の提言をいたします。

1. 点から線へ、歩けるまちづくり多可町散策マップの作成。

学外研修で伏見や赤穂に行った時、車を置いて散策することに楽しさがありました。特に伏見での水辺の散策、坂越でのまち並散策は印象に残るものでした。それぞれの地域のガイドマップやパンフレットにはモデル散策コースが入り、各施設の紹介もあって、便利で興味深いものになっています。

この多可町でも、旧 3 町時代からの観光ガイドマップやパンフレットはよく目にし、いろいろな種類があります。

観光を産業にしているまちではガイドマップも十分活用されているようですが、大きな観光産業を持たない地域ではまだまだ十分とは言えないようです。合併間もない多可町としては、何よりも地域住民の方が活用され、旧 3 町の垣根を越えた郷土意識が生まれるガイドマップがあればと考えます。もちろん、多可町を訪れる町外の方や多可町の PR にも必需品です。

町内には誇るべき自然があり、歴史・文化の面でも他に引けをとらない内容があります。これまでの個々の施設の紹介や旧 3 町内の観光ガイドを踏まえて、多可町として新たな視点で、「ふるさとの良さ」「町の自慢」をまず住民の方が再認識し、併せて町内外へ紹介するための、「多可町散策マップ」の作成を提案します。

誇れる自然環境、史跡や観光地、伝統芸能・工芸の各分野に関するスポット、特色ある民間企業・店舗、更には公共施設等を結ぶコースを表示し、総合的に町の情報を紹介します。

講座の中で、北播磨城郭研究会の藤原孝三さんに八千代区光竜寺山城を案内していただいた時、詳細な資料を作成されていました。このような資料も散策マップに関連付けて広く一般の目にふれれば、更なる郷土への愛着心が湧いてくるものと思われまます。

散策マップには、その場所の写真や解説を掲載し、各ポイントをテーマごとの探訪コースに分類し、所要時間をまじえて表示したり、公共施設等を中心に、多可町ならではの自然を歩くコースや自転車で回る散策コースを設定したものにします。

施設や場所のピックアップ、コースの選定をする中で、野原や川の景観を生かしたコースづくりや昔の面影を残す通りの整備を、行政の力を借りながら住民の

手で進めることが出来たら素晴らしいことでしょう。人が動いてこそ、多可町は活力あるまちになると確信します。

もう一つの特徴として、散策マップには「ユニバーサルデザインマップ」を組み込み、各施設の利用のしやすさ、散策のしやすさを一目で分かるようにします。

このようなマップを製作できれば、次のステップとしての町内外住民の見学会、学習会、交流会、意見交換会を通じて、更なるまちおこしの拡大につなげていけるのではないのでしょうか。

2. 多可の魅力ある人物紹介で、まちづくり・人づくりを再認識

加美区在住の家具職人笹倉徹さんや、竹の再生に取り組んでおられる中区の岸本明朗さんにお越しいただいて、それぞれの職人技を紹介していただきました。地元にもこのような貴重な技を持った方や、取り組みをされている方がいらっしゃることを改めて知ったような訳です。

このように多可町を拠点に活躍されている「その道の達人」云わば「人間町宝」と呼べる人や、特色ある取り組みをされている企業人やグループがたくさんいらっしゃいます。その方たちの活動内容を町内外に紹介し、多可町の魅力発掘や人づくりに一役買ってもらってはどうか。成功への道程、人生観には大いに学ぶものがあります。

また、それらの人々の「多可町内での活躍」や「多可町のすがた」が他の地域で紹介されることがあれば更に素晴らしいことです。

3. 世代を越えた交流に「昔懐かしいもの」云わば「昭和の資料館」をオープンして、人と地域の活性化、更には地域の方向付けに役立てる

ずぼんぼ作りの大中良法さんや多可地方の方言の川口昭三さんから、昔の遊びや地域の言葉、伝承を守り伝えることの必要性や素朴なものの楽しさを学びました。また学外研修での月桂冠大倉記念館や坂越奥藤酒造の郷土館を訪れ、昔懐かしい日用品や看板等を見ていますと、懐かしさと共に生き生きとした気分になっているのに気が付きます。こういった昔からの地域の伝承事や民俗資料の蒐集整理は、子供にとっては新鮮素朴で楽しいものとして映り、大人にはいろんな思いが巡り、脳や日々の暮らしの活性化にもつながるようです。

現代人が忘れている人間の本质を見直したり、次世代に何を残すべきかを考える一つのきっかけになることでしょう。

この高齢社会の中では、今後ますます世代を越えた交流の機会を増やすことや、老人力を生かすことが重要であると思われます。高齢者にとって昔を語ることは生き生きとした日常生活を送ることにつながり、地域生活の質の向上にもつながるものと考えます。